

明星学園 創立100周年記念 依田 好照先生 講演

明星100年から学んだこと

研究を怠らず “子ども中心”を忘れず 父母に支えられた100年

創立期を中心に



学校法人 明星学園

明星 100 年から学んだこと

研究を怠らず “子ども中心” を忘れず 父母に支えられた 100 年
創立期を中心に

講 師	依田 好照先生
進 行	渡辺 京先生、大草 美紀氏
日 時	2020 年 8 月 26 日(水) 16:00 ~ 18:00
場 所	明星学園高等学校 れいめいホール

依田先生講演会記録の発刊にあたって

明星学園中学校・高等学校校長 平野 康弘

このたび、明星学園創立 100 周年に向けた記念行事の最初を飾っていただくために、長年明星学園小中学校の校長を務めておられた依田好照先生に講演をお願いしました。依田先生は、校長在任中から明星の歴史について良く研究しておられ、明星の生き字引のような方です。全教職員に向けて語られた内容は、明星の存在意義を改めて実感させられるものでした。「我々も学園の歴史を汚さないように頑張らなくては」との思いを強めました。この講演で語られたことを自らの糧とするため、また、講演をお聞きになれなかった方々に向けてお伝えするためにも、この記録を刊行することとしました。

明星学園は、志を持った教職員たちが理想の教育を実現する目的で創立した学校です。常に生徒たちを中心に置き、表面的な知識注入を排除して、生徒たちを本物に出合わせることを目標として研究を続けてきました。創立以来、そのような学園の教育理念に賛同してくださった多くの保護者に支えられ、財政的にも支援を受け続け存続してきました。

まもなく創立 100 周年を迎えようとしている今、学園の歴史を正しく学び、現代でも、いや現代だからこそ重要である創立理念を噛みしめ、現在の子どもたちのために、改めて本物の教育を日々創っていこうという思いを新たにしております。

現在の私たちへのメッセージとして依田先生が語ってくださったこの内容を、多くの方と共有し、少しでもお伝えできればと思います。お話しくださった依田好照先生への感謝はもちろん、講演記録をテープ起こししてくださった PTA 役員会、PTA100 周年記念誌編集ボランティアの皆様、資料整備委員会の大草美紀さんにも深く感謝いたします。





依田好照
朗らかに
強く

依田好照先生のご紹介

依田好照先生は山梨県のご出身で、早稲田大学第一文学部を優秀な成績で卒業されました。1957年(昭和32)明星学園中学校に就職し、26年間中学校社会科教員として活躍されてきました。1983年(昭和58)に遠藤豊校長と無着成恭教頭が退職されるという混乱の時期に、教職員たちの期待を一身に背負って小学校・中学校の校長を引き受けられました。それから4期12年間、1998年(平成10)に退職されるまで、明星学園小学校・中学校の校長、常務理事として、学園の再建を支えてくださいました。

依田先生の軽快な語り口は、生徒たちの人気の的であり、学校説明会でも参加者の心を射止めていました。それまで行われていた公開研究会を、授業研究中心の明星本来の研究会に立て直すことに、現場の教員たちと手を携えてご尽力されました。

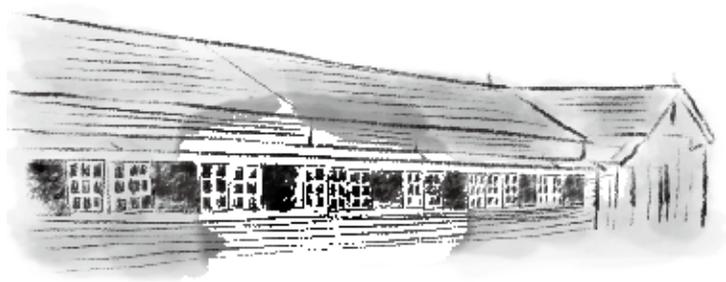
(文責：平野 康弘)



明星 100 年から学んだこと

研究を怠らず
“子ども中心”を忘れず
父母に支えられた 100 年

創立期を中心に



麦畑から学校へ

今日のタイトルにもあるように「この 100 年から学んだこと」はたくさんあります。そのうちの一つ二つをお話したいと思います。明星学園の歴史は「研究を怠らず、子ども中心を忘れず、父母に支えられた 100 年」であったと私は思います。それでこのような表題にいたしました。今日は時間が少ないので、学園の創立期のお話の一端を申し述べます。

創立者のリーダー赤井米吉先生が「明星五年」と題する文章を『渾沌』第 8 巻第 1 号 1929 年(昭和 4)1 月 22 日発行という教育総合誌に寄稿しておられて、次のように書かれています。



昭和初期の学園周辺の様子
三鷹市教育委員会発行
写真集『みたかの今昔』(2000 年)より

「私共がここに学園建設の仕事にかかった時には、ここは麦畑であった。(中略)私共は校舎を建てるには先ずその麦をとって地均しをしなければならなかった。私は人夫の人々が麦を取除いているのを見て空恐ろしい感に打たれた。(中略)私はこれは何か大きな罰が来ないではすまないような気がした。これは非常に大きな収穫をして償をし

なければならぬと考えた。人々の食う糧は作れないが、人そのものを造ることに努めねばならぬと考えた。」

このように、麦畑にせっかく植えた麦をつぶして、そこに建物を建て、グラウンドを作り、学校を建設することに、非常に強い戸惑いを覚えたのですね。この麦を作る人たちに対して、こんなことをしてよいのだろうか、と先生は考えました。そして、自分は今さら農民にはなれないけれど、その代わり人間をつくること、人間を育てることに努めなくてはならない、という考えを述べられているわけです。



4人の明星学園創立同人



(左から)照井げん先生、赤井米吉先生、
山本徳行先生、照井猪一郎先生

次に創立同人を紹介しましょう。この4人が明星学園の生みの親、育ての親です。新宿早稲田の大学の近くに成城小学校という学校が開校され、そこで出会った教師たちです。

リーダーの赤井米吉先生。照井猪一郎先生。猪一郎先生の奥様で照井げん先生。愛媛出身の山本徳行先生。この4人が心を合わせて明星学園をつくりました。

● 成城小学校での出会い



澤柳政太郎先生
1917年(大正6)創立
成城小学校初代校長

この方が澤柳政太郎先生。長野県出身で、東京帝国大学を出て文部次官になられ、東北帝大や京都帝大の総長をなさって、そして、一息ついたところで新宿牛込にあった成城中学校という学校に迎えられます。澤柳先生は、実は小学校の教育に非常に関心が強く、中学校の校長に就くにあたり「中学校の中に小学校をつくってくれるなら、校長を引き受けてもいいよ」という条件を出しました。そういうことなら、小学校をつくるので、ぜひお願いします、という形で澤柳先生はまず成城中学校の校長になり、やがて、小学校ができるとその校長になりました。



● 赤井 米吉先生



赤井米吉先生
(1924 - 46年度 / 1965 - 73年度在職)

しばらくして、この成城小学校に赤井米吉先生が招かれます。赤井先生は、石川県出身で広島高等師範学校を卒業し、愛媛・福井・秋田などの学校に勤めました。秋田師範付属小学校の主事だったときに、広島高等師範で親しかった小原國芳先生に招かれて成城小学校の幹事として着任します。小原先生はのちに玉川学園を創設なさいますが、明星学園創立以来、赤井先生はこの小原先生と二人、よき友よきライバルとして過ごしました。

● 照井 猪一郎先生

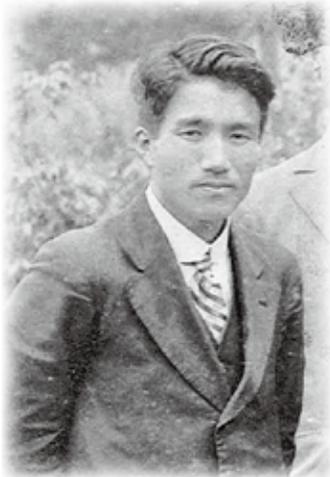


照井猪一郎先生
(1924 - 64年度在職)

秋田県出身で秋田師範付属小学校で教えていましたが、ここに赤井先生が主事(教頭)としてやってきました。のちに赤井先生に呼ばれて成城小学校へ就職し、実践を積みます。やがて、赤井先生とともに明星学園をつくります。照井猪一郎という人は絵が好きで、画家としても大成したいと思っていたようですが、それは叶わず、明星学園をつくり、苦勞していかれることとなります。あとでお話する教科書づくりにも中心人物として登場いたします。



● 山本 徳行先生



山本徳行先生
(1924-28年度在職)

愛媛県出身で、赤井先生が愛媛師範学校で教えていた時の教え子です。明星創立当時27歳。まだ若いですね。この先生も成城小学校で教えていましたが、照井先生らとともに明星学園の創立に関わりました。そして創立時の3年生を卒業まで担任し、その翌年、5年間過ごした明星を退職されました。のちに故郷の愛媛県で今治明德学園初代理事長、今治明德高等学校校長、短期大学学長を兼務されます。

● 照井 げん先生



照井げん先生
(1924-65年度在職)

秋田県出身で秋田県女子師範学校を卒業され、成城小学校の教員になりました。照井猪一郎先生と結婚して照井姓になりました(旧姓：加藤)。明星創立当時1年生を担当し、音楽科を担当されました。創立時34歳でした。きちんとした事務局ができるまでの長い期間、げん先生が学園の経理業務も兼務されていました。



明星学園の誕生



開校記念写真
1924年(大正13)5月16日撮影

これは開校記念の写真です。5月15日は土砂降りの天気でした。これは翌日撮った写真です。1、2、3年生合わせてたったの21名の児童。それとここに立っている4人の先生。これで明星学園は始まりました。



親御さんと一緒に開校記念写真
1924年(大正13)5月16日撮影



照井げん先生と受け持ちの1年生(22名)
1925年(大正14)1月撮影



照井猪一郎先生と受け持ちの2年生(16名)
1925年(大正14)1月撮影



山本徳行先生と受け持ちの3年生(19名)
1925年(大正14)1月撮影



開校から約8ヶ月で生徒が倍以上、57名に増えました。始まったばかりの学校でしたが、大勢の人たちに認められて、「良い学校だ」といううわさが広がって、次々にこの学校に我が子を預ける父母の方が増えていったわけです。

第一次世界大戦後、「大正デモクラシー」という一時期がありました。その「大正デモクラシー」のなかで、新しく生まれてきた中産階層が我が子の教育のために、特色ある私立学校を選択することも増えてきました。そういう時の運もあったかもしれませんが、とにかく4人の先生たちの斬新な教育方法が評判になり、「明星学園という良い学校ができた、我が子も入れよう」このように口伝えに広がっていったのです。

※詳しくは『明星の年輪—明星学園90年のあゆみ』P.6～21

創立期の学園と子どもたちの様子



創立期のグラウンドです。滑り台もあります。このように先生も子どもたちも一緒になって、よく外で遊んでいました。



天気の良い日は先生と一緒に外でお弁当を食べます。



これは、公園の中の橋を渡って学校に登校してくる写真です。





井の頭公園の杉並木を通して学校へ向かう写真です。現在に比べ杉の巨木が多く、昼なお暗い井の頭公園でした。井の頭線の開業前でしたので、通学路も今とはちがいました。



綱引きをしています。まん中で照井先生が声援を送って、げん先生が見守っています。奥で旗を振っているのは赤井先生でしょうか。



ドッジボールをしているのでしょうか。グラウンドの向こうに広がる森とはまだ境目もありません。



1925年(大正14)2月1日

次は雪の朝。この頃は雪もよく降ったようです。雪が積もった時もみんな喜んでグラウンドで大きな雪だるまを作って遊んでいます。



左が音楽室で右が教室です。井野建設が建ててくださった校舎です。教室の前に背の低い植木がありますが、これは茶郷さんの奥様が、国分寺のご自宅の植木を運ばせて、一本一本植えてくださいました。これが5年、10年子どもたちと一緒に成長して、学園らしくなってきたわけです。



盛んだった児童劇



紀元節 劇の会
1926年(大正15)2月11日

次は児童劇の写真ですね。外で椅子に座って、親御さんたちが劇を観ています。客席の向こうにある廊下を舞台にして劇をやっているところですね。この頃は全国的に児童劇がひじょうに盛んでした。特に、照井猪一郎先生が指導した明星の子どもたちの児童劇は評判で、あちらこちらから見学に来る方々もいたようです。



これは照井先生が創作した台本の一部です。『夜明けまで』作：照井猪一郎、曲：吉原規。この吉原さんも明星の保護者の一人で音楽家、作曲家でした。左は『お地蔵さんは知ってるか』。これはNHKのラジオで取り上げられ、放送されました。おそらく児童劇の放送では、明星学園は成城小学校に次いで有名でした。



3年生「こぶとり」
1926年(大正15)2月11日



4年生「おろち退治」
1926年(大正15)2月11日



創立10周年記念学芸会
「お地蔵さんは知ってるか」
1934年(昭和9)5月19日
於 日本青年館



労作教育

明星は楽しい学校ですが、労作教育といって子どもたちに労働も体験させました。これはグラウンドの裏の畑で畑作をしている写真です。明星とは姉妹のような学校である玉川学園は、今でも労作教育に力を入れていますね。動物を飼って乳を搾ったり、チーズを作ったり、というような実地で働く、そういう労作教育を続けています。明星では玉川学園ほど熱心ではありませんでしたが、都会育ちの子どもたちに土にふれる仕事をさせました。



大高義一先生と子どもたち(3回生)
校舎北側の畑で



山本徳行先生の指導で種まき(1回生)



通学路(公園入口)の除雪作業
1936年(昭和11)

雪の日は雪かきもしました。この場所は、井の頭公園の池の向こう側、焼き鳥のいせ屋から井の頭の池に向かう階段です。この頃は今より雪が多くて、明星の子どもたちは通学路でもある井の頭公園の中まで雪かきをしました。



「歩く学校」— 遠足・登山



多摩川の上流



御岳山

次は遠足です。左側は多摩川の上流、右は御岳山ですね。当時、世間からは珍しがられて「歩く学校」と呼ばれることもありました。皆さんの中には卒業生もいらっしゃると思いますが、ご自分の体験も記憶があると思います。

僕は今朝、古い卒業生の一人に電話して、「遠足の時、何を持って行ったかね」と聞いたら、持っていったのはお弁当とキャラメル1箱と、それから果物1個。これが決められた持ち物だったということでした。



箱根大涌谷



富士山登山中の赤井先生



日光華厳の滝



先生たちの意図として、日本は火山国であるということ、実地で勉強させ調べさせたいという狙いがありました。遠足はもちろん歩くのがメインですが、どこを歩くか、何を見るかも重要で、明星では火山帯の実態を、数年間かけてまとめあげていく、こういう学習でした。



筑波山登山の様子

夏季生活



2・3年生 女学部裁縫室での夏季生活

次に合宿の写真です。これは高等女学校（女学部）の裁縫室で合宿している様子です。小学校1年生は宿泊行事は行いませんでしたが、2・3年生は、夏には女学部校舎に泊まって集団生活をしました。戦前はずっと続けていた行事です。



4・5年生 千葉県千倉の夏季生活
(14・15回生)
1940年(昭和15)7月

次は4・5年生の海の生活です。千倉の生活ですね。今も続けていますが、今年はコロナ禍のため行けなかった。残念でしたね。明星の海の家は、照井猪一郎先生が卒業生の青年たちと一緒に、1936年(昭和11)の秋、理想の候補地を求めて房総半島を調べ歩いたことから始まりました。



そして外房の健田村(今の千倉)に最適な場所を発見しました。千倉での夏季生活は翌1937年(昭和12)から始めました。歩く学校でもあり、海でも活動する学校でもある、ということですね。千倉の寮は老朽化のため2001年7月を最後に使わなくなりましたが、現在も寮のすぐ近くの旅館で小学校の夏季生活を続けています。

次は軽井沢寮生活の写真です。このあとお話ししますが、軽井沢の地主である市村今朝蔵さんという方が寮の建設地として3,000坪の土地を寄付してくださいました。寄付されたのは1930年(昭和5)でした。軽井沢の寮も老朽化して十数年前から使えなくなりましたが、かつては毎年毎年、小学校高学年と中学生と、両方が交代で使っていました。



6年生(13回生)の軽井沢夏季行事
1939年(昭和14)



軽井沢の寮を拠点として、浅間山、妙義山、八ヶ岳への登山や、小諸の懐古園、長野の善光寺など、長野県内のさまざまな場所へ遠征しました。

※『明星の年輪-明星学園90年のあゆみ』P.79～87



明星学園創立の大恩人



茶郷基さん



茶郷シヨさん

このお二人は茶郷^{さこうもとい}基さん、シヨさんとおっしゃって明星学園創立の大恩人です。茶郷さんは、赤井先生と同郷の石川県出身でした。国分寺に1万坪の邸宅を持つ大変なお金持ちで、朝鮮の金山の経営などもされていました。お嬢さんの喜久子さんが、成城小学校の照井先生のクラスにいらっしゃいました。

赤井先生が茶郷氏のご自宅を訪ね、「新しい学校をつくりたいが金がない。なんとか助けてください。とにかく1万円※貸してください…」とお願いしました。茶郷氏は「それでは足りないでしょう」と借地代やら、先生たちの給料まで出してくださいました。

※大正末期の大卒サラリーマンの初任給が50～60円だったことから、当時の1万円を現在の価値に換算すると、約4～5千万円程度と考えられます。

奥さんのシヨさんも、学園創立の力になってくださいました。開校式の日には稲荷寿司をたくさん作って届けてくださったり、開校してからは校内に植える植木をご自宅の庭から職人さんを頼んで移植してくださいました。茶郷基さん、茶郷シヨさん、お二人とも創立の大恩人です。

創立から2年経ち、子どもの数が増えて教室の増設が必要になりました。吉祥寺にあった建築会社、井野建設社長の井野正次郎さんが5・6年生の教室と音楽室などを作ってくださいました。正二郎さんのお嬢さんは、長く明星にいらっしゃる方なら思い出すでしょうが、のちに明星で音楽の先生になった北川カエさんです(4回生)。この校舎建築の話になると北川先生は、「うちの父



井野建設社長
井野正次郎さん



は、明星の5・6年生の教室やら、音楽室やらを作ったのだけれども、どうやら赤井先生から一銭もお金を貰った憶えがない」と言っていました。この方もまた明星の恩人です。



5・6年生教室 増築時の上棟式
1926年(大正15)



市村今朝蔵さん

この方は、早稲田大学の教授(政治学)で、市村今朝蔵さんとおっしゃいます。中軽井沢一帯の土地を持っていた市村家の御曹司でした。この方が赤井先生の教育方針にぞっこん惚れ込んで、中軽井沢の3,000坪の土地を1930年(昭和5)の春、明星にポンと寄付してくださいました。この軽井沢の土地が、小学校高学年・中学生の夏季生活の本拠地になりました。

今朝蔵さんは1935年(昭和10)から学園の理事として赤井先生を援け、1947年(昭和22)からは理事長として、1950年(昭和25)に逝去されるまで学園経営に尽力されました。その後、夫人のきよじさんも学園評議員を長くつとめてくださいました。さらに今朝蔵さんの弟の寅之輔さんも1961年(昭和36)から1964年(昭和39)に逝去されるまで、学園理事長を務められました。



明星学園に中等学校ができるまで

中学校・高等学校のなりたちについて、現在の明星学園を支えてくださっている皆さんのなかにも興味をお持ちの方が多いと思いますので、ここで少し触れておきましょう。

今のかたちの中学校・高等学校が明星学園で発足したのは、第二次世界大戦後です。1947年(昭和22)3月に教育基本法と学校教育法が公布され、6・3・3制を柱とする学校制度ができました。明星でも1947年(昭和22)4月に新制中学校が、1948年(昭和23)4月に新制高等学校が発足しました。

では、それ以前の明星には小学校しかなかったのかといえば、そんなことはありません。明星にも13歳から17歳の子どもたちが通う5年制の中等学校がありました。男子の通う明星学園中学校(中学部)と、女子の通う明星学園高等女学校(女学部)です。

男女共学は明星の基本

明星学園は創立時から男女共学を教育の基本と考えており、当時の教員たちは中等学校をつくる时候にも当然男女共学にしたいという信念を持っていました。

しかしその時代、国の認可を受けられる正式な中等学校は男女別学で、同じ敷地内に男女の校舎の併設を許さないばかりか、男女それぞれの校舎はある程度敷地の距離も離さなければいけない、女学校には若い独身の男性教員を採用することも禁ずるという状況でした。さらに中学校(男子)には配属将校を置いて軍事教練も行わなければならないなど、数々の法の取り決めがありました。

創立者の赤井米吉は小学校創立時から、法令によって定められた「正規の」中学校・高等女学校を併設しようとは考えていませんでした。文化学院や自由学園と同じような、法令上の制約にしばられない「各種学校」として、自由に新しい試みをしたと考えたのです。

創立間もない1924年(大正13)夏、講演のために日本領だった朝鮮を訪れた赤井は、旧友・上田八一郎の家に立ち寄ります。朝鮮の大邱^{テグ}中学校の教頭だった上田は、広島高等師範学校で赤井の1年後輩で、学生時代から親しい間柄でした。





上田八一郎先生
(1928-65 年度在職)

このとき赤井は、「3年後に中学部・女学部を併設するから、上京してこの仕事を手伝ってくれ」と上田に言いました。これに対して上田は「1学級30名、生徒総数150名を超えないこと。男女共学、無認可の学校。上級学校入試準備の要らない学校。武道と教練のない学校……」などの条件を述べたといいます。赤井はそれを笑いながら聴いていました。

それから2年半後の1927年(昭和2)2月、上田は赤井からの「いよいよ出て来い」という連絡を受けます。学園創立時、3年生として入学した児童たちが5年生になり、上級学校の併設がいよいよ現実問題となっていたのです。そして、1927年(昭和2)7月、上田は大邱中学校を退官して上京しました。

困難を極めた中学校・高等女学校の創設

前述の通り、教員たちの理想を実現するためには、明星学園の中等学校は自由で新しい教育を行う「各種学校」として設置される方向でした。

では、いっぽうの当事者である子どもたち、そして親御さんたちはどう考えていたのでしょうか？

この時期—大正～昭和初期、第一次世界大戦後の日本はたいへんな好景気に沸いていました。いわゆる大戦景気、戦争景気と呼ばれるものです。そうした時代を背景に、都市部に住み比較的経済的に豊かな「新中産階層」が徐々に増え、彼らの間では子どもたちの進学競争が過熱していました。成城小学校や明星学園などの私立学校に子どもを通わせた家庭の多くもこれらの人々に当てはまります。こうした新しい市民層のなかでも、特にリベラルな思想をもった人たちが明星学園を選んだと言えましょう。このような人たちは、子どもの自発的な活動を尊重する新教育＝大正自由教育を支持しつつも、同時に我が子には高等教育を受けさせたいと考えていましたから、当然学校には受験に必要な



学力をつけさせることも求めています。

赤井をはじめとする明星の教員たちの理想と、親たちの希望との間には、このように差があったわけです。

『90年のあゆみ』から引用すると……

明星には中学校・高等女学校がないから、子どもたちは既存の中学校・高等女学校を受験することになる。進学競争の過熱や受験準備のための教育をいくら批判してみたところで、肝心の子どもが希望する学校に入学できないのでは困る。また、中等学校を「各種学校」として運営した場合、生徒たちは卒業しても上級学校(高等学校、専門学校)を受験する資格が得られないという問題もあった。上級学校を受験するためには、改めてむずかしい認定試験を受けなくてはならない。

「生徒はわたしの所有物ではない。わたしの教育理想の犠牲になるべきものではない。やはり普通の中学校・高等女学校としての認可を受けて、その規定の範囲内で可能な限り新しい試みをやるべきだ」。

赤井はそう考えて「財団法人明星学園」という組織をつくり、財団が運営する中学校・高等女学校として認可を取ることを決心した。

『明星の年輪—明星学園 90年のあゆみ』P.66-67

赤井がそう決心したものの、資金計画をはじめとして越えなければならない難関がまだいくつもありました。

当時小学校は個人経営でも許されたのですが、中等学校以上は経営母体を法人化する必要がありました。法人化には多額の「基本金」が必要で、お金のない明星にとっては、ここでもまた資金不足が大きな壁となったのです。あれこれと手を尽くしたものの基本金のあては見つからず、「こうなったらやはり無認可の各種学校にするしかないのではないか」といったんは諦めて、上田は文化学院や自由学園へ見学に行ったりしていました。

ですが、父母の間からは「どうしても、将来は大学受験が可能な学校にしてほしい」という要望が強く、ここで、誕生したばかりの「母の会」が積極的に動き出しました。



「母の会」の誕生

公立学校とは違って私立学校の子どもたちはさまざまな地域から通って来ます。学校が一つしかない地域や、先祖代々その村で暮らしているような地域であれば、子ども顔を見ればどの家の子か分かるものですが、明星のような私学では学校を中心として父母らが集まらなければ、お互いに知り合うこともできません。そこで明星では創立の初期、まだ教室に余裕があった頃、一つの部屋を「母の部屋」として母親たちが自由に使えるようにしておきました。そして、家庭同士の横の連絡のために、通常の「父兄会」とは別に、母親たちのために学期ごとにさまざまな会合を頻繁に催しました。教員らは「お母さん方もその意味を理解して、よく学園に来てくださった」、「学園内のいろいろな仕事を手伝ってくださった」と語っています。創立の翌年から始まった10日間の夏季行事にも、お手伝いのために母親が何人も参加して、炊事や子どもの世話を引き受けてくれました。



山之内鈴衛さん

「母の会」の主な目的は、自分たちの文化活動を通して母親同士の交流を深めることでした。子どもたちの教育について教員らと話し合うだけでなく、母親自身の教養を高めるための企画も催されました。そして、明星学園の中等学校の設立についても「母の会」が大きな役割を果たしました。

こうして1年、2年と年を重ねるうちに、学級ごとの母親同士の交流が密になり、やがて他の学年とも交流が生まれて、ついに1927年(昭和2)1月に、山之内鈴衛さん、安田堇さんらが中心となり、現在のPTAの前身ともいえる明星独自の組織「母の会」がつくられました。



母の会主催 永井柳太郎拓務大臣
(前列中央、赤井先生と上田先生の間が永井氏)
講演記念写真、母の会の皆さんと教職員ら
1934年(昭和9)10月13日



「明星学園後援会」の発足



山之内兵十郎さん

資金難を理由に「各種学校」へと傾きかけていた中等学校設置問題。立ち上がった「母の会」は父親たちに熱心に訴えかけ、今度は父親たちの有志が集まって何度も話し合いを重ねました。そして1927年(昭和2)10月2日に開かれた「父兄総会」で、「明星学園後援会」が組織されることが決まり、後援会が中等学校の設立を引き受けることになったのです。この後援会の中心人物が山之内兵十郎さん、「母の会」のまとめ役であった山之内鈴衛さんの夫です。

後援会の役員は連日、山之内さんのお家で「資金難を乗り切るためにどうすべきか」について話し合いを重ね、「父母総会」で中等学校創立のために1口30円の寄付を募りました。山之内さんをはじめ3人の保護者から100口の大口寄付があり、全校では110人から3万3千円という大金が集まりました。ただし、法人化に必要な「基本金」は、中学校・高等女学校で合計11万円が必要で、依然として厳しい状況が続きました。しかし、茶郷基氏、尾高豊作氏^{※1}、川井源八氏^{※2}、服部春一氏^{※3}から、合計11万円を借り受けることができ、これでようやく認可申請のめどが立ったのです。

明星では発足当初から旧制中学校を「中学部」と、高等女学校を「女学部」と呼んでいました。全校合同の行事を「3部合同」と呼んだことや、現在でも小中高それぞれの職員会議を「部会」と呼ぶところなどに当時の名残が見られます。ここからは当時を懐かしみ、新制中学校と区別する意味でも、「中学部」、「女学部」の通称を使ってお話しします。

※1 渋沢栄一の孫で赤井先生の友人。『新讀本』などを出版した刀江書院の社長、明星学園顧問

※2 保護者・三菱電機会社社長

※3 保護者・国際図書社長



中学校・高等女学校の誕生

1928年(昭和3)2月17日、中学校(中学部)・高等女学校(女学部)創立に関わる書類を東京府に提出。

同年4月5日、小学校の敷地内、既存校舎の北側に女学部の校舎が完成。

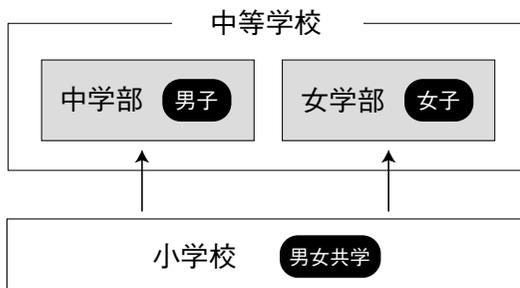
前述の通り、当時中等学校として国の認可を受けるには男女別学で、しかも男女それぞれの校舎は、ある程度離れた場所になければいけない、という法の定めがありました。そのため、玉川上水を挟んだ土地(現在の明星学園高等学校敷地)を、中学部校地として新たに取得し、京橋区の林間学校として使用されていた建物を公売入札で落札し、校舎として移築しました。中学部の校地は、戦後、男女共学の新制高等学校として生まれ変わりますが、現在も小・中学校と高等学校の敷地が離れているのにはこのような理由があるのです。



女学部の朝礼
1937年(昭和12)頃

こうして1928年(昭和3)4月9日に女学部の、翌10日に中学部の第1回入学式が行われました。

入学者は中学部16名、女学部14名。小さな中等学校のスタートでしたが、これは母親たちの熱意が父親たちを動かし、父母が一体となって取り組んだ支援の賜物でした。



中学部と女学部はともに5年制で、現在の中学校・高等学校にあたる年代の少年少女のための学校でした。女学部の校長は赤井園長が兼務し、中学部の校長には上田八一郎先生が就任しました。



校友会誌『明星時報』『星雲時代』

女学部では『明星時報』（または略して『明星』）という校友会誌がつくられていました。資料室に残っている数少ない『明星時報』は、女学部卒業生で、新制中学・高校の国語科教諭を長く勤めた岸すみれさん(10 回生)が寄付してくださったものがほとんどです。岸先生は 1942 年(昭和 17) 3 月に女学部を卒業しました。戦争中、空襲に遭ったときにも焼かれないように抱いて逃げたというほど大切にしてきた『明星時報』を、のちに学園資料室に寄付してくださいました。

いっぽう中学部でも、国語科の内野健児先生の指導のもと、1932 年(昭和 7) 11 月に『星雲時代』という校友会誌が創刊されました。『星雲時代』も現存する号は少ないのですが、1 回生の加藤誠之助さんが保存していた創刊号から 14 号までが残っています。

『90 年のあゆみ』にも『明星時報』『星雲時代』をもとに執筆した部分が多いです。※『明星の年輪—明星学園 90 年のあゆみ』P.71～78 他



『明星時報』



『星雲時代』



中学部・女学部の授業と行事

中学部・女学部の授業は、国語・数学・英語・理科・地理歴史(のちに公民)・音楽・体育・美術・修身のほか、名曲鑑賞の時間もあったそうです。このほかに女学部では割烹(料理)・手芸裁縫(洋裁、和裁)・書道の授業もありました。



女学部1年生(1回生)と赤井先生
1928年(昭和3)



割烹室にて(1回生)
1931年(昭和6)

女学部の課外行事としては、春には富士山麓や日光などへの遠足、夏には軽井沢の寮で全校参加の夏季生活、秋には美術館や社会科見学に行きました。最終学年の5年生では東北地方や上高地などへ修学旅行と、積極的にさまざまな地方へ出かけていました(修学旅行は太平洋戦争の影響を受け1942年(昭和17)6月に11回生が上高地へ行ったのが最後となる)。



5年生(4回生)夏季行事 軽井沢の寮
1935年(昭和10)7月



5年生(10回生)上高地へ修学旅行
1941年(昭和16)10月



いっぽうの中学部も日光・鬼怒川方面、秩父・川越方面などへ遠足、夏は房総や茨城などの海辺で夏季行事(水泳訓練)、近くでは三鷹の国立天文台や村山貯水池などへもよく行っていたようです。また、男子生徒に課された軍事教練は1931年(昭和6)から始まり、軽井沢や富士山麓などで数日間の野外演習も行われました。



中学部(5～9回生)遠足 村山貯水池へ
1936年(昭和11)5月9日



伊東臨海生活
1936年(昭和11)7月20日～28日



富士演習地で軍事教練
1937年(昭和12)7月7日



初期の明星では法の定めによって、男女共学は実現できませんでしたが、小・中・女3部合同で行われた行事が多く、男女の別なく全校一緒に行うことを目指していたのだと思います。学芸会・美術展などの行事は創立10周年を迎えるころまで、また運動会も太平洋戦争開戦直前まで、3部合同で開かれていました。



3部合同の運動会
1935年(昭和10)10月

中学部・女学部ではクラブ活動も盛んで、演劇、音楽、美術、科学(機械・天文・昆虫)、陸上競技、籠球(バスケットボール)、剣道、文芸、舞踊、器楽(ヴァイオリン他)、茶道など、生徒の要望に応じて指導者を付けて課外活動が行われていました。

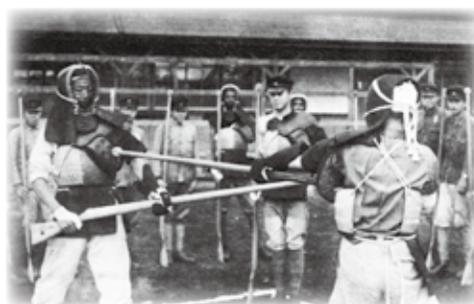


戦争の影響と深い爪痕

1941年(昭和16)12月8日、太平洋戦争が開戦すると、明星も戦争の大きな流れに巻き込まれていきます。1943年(昭和18)には勤労奉仕が義務になり、生徒たちは宮城(皇居)や公園の清掃などに駆り出され、翌1944年(昭和19)になると学校近くの軍需工場の清掃や社員の昼食づくり、軍施設に派遣されての雑労働なども加わって、次第に学校での授業時間が減らされていきます。女学部では体操の授業に薙刀が加わり、音楽では「海ゆかば」を歌いました。また、英語の授業は禁止されましたが、女学部英語担当の青木ふみ先生は、生徒たちが勤労働員されるまで英語を教えてくださいましたと13回生の馬場洋子さんは語っています。



薙刀練習をする女学生
1944年(昭和19)



銃剣術をする中学生
1942年(昭和17)

家に帰っても「隣組」が中心となって東京空襲に備えて防空訓練に励む日々でした。やがて「勤労働員」が始まって学校は休校となり、生徒たちは日本無線の子会社の船用無線(男子)や、立川の昭和飛行機(女子)など、割り振られた工場へ出勤し、無線機や飛行機を組み立てる作業にあたりました。日増しに悪くなる食糧事情のなかで、育ち盛りの子どもたちは、お腹をすかせたまま、戦争のために働かされました。

戦争末期の1945年(昭和20)3月、明星の中・女学部では5年生の第13回卒業式を迎えましたが、このとき1学年下の4年生(14回生)も一緒に繰り上げて卒業させられました。本来5年制の学校であるのに、1943年(昭和18)1月の中等学校令施行でこの年度の入学生から修業年限が4年に短縮され、さらに1945年(昭和20)3月には同令施行前の1941年(昭和16)に入学した生徒にも「修業



年限4年(修業年限短縮)」が適用されたからです。

明星の生徒たちも、13回生までは5年間在学しましたが、13回生も学生生活を送れたのは2年生までで、3～5年生の3年間(1943～45年)は勤労働員で終わりました。次の14回生はさらに悲惨です。学校で勉強ができたのは1年生の時だけで、あとは勤労働員で工場に通うか、教室で学校工場(明星の校舎も接収されて機械が運び入れられ軍需工場になっていた)の仕事をさせられる日々でした。そして4年生を終了した時点で卒業させられてしまったのです。さらにこれらの生徒たちは卒業後も「専攻科」と呼ばれ、敗戦の日まで引き続き工場への動員を余儀なくされました。

1945年(昭和20)8月15日にラジオで「玉音放送」が流され、日本の敗戦が国民に知らされました。

戦争が終わり、中学部、女学部1・2・3年生の生徒たちは学校へ戻りましたが、教練で使った小銃などの武器をアメリカ軍に引き渡すために揃えたり、軍需工場として使われて油だらけになった教室を掃除したりする日が続きました。終戦後の教室の汚れ方はひどかった、と照井げん先生も書き残しています。食べ物も物資も乏しく、しばらくは勉強ができる環境に戻れませんでした。

1946年(昭和21)3月、中学部では前年に続き4年生で卒業するか、または5年生まで残るかを選べたようですが、女学部では全員4年生で卒業しました。この年の卒業生・15回生の男子は「1946年(昭和21)3月卒業」と「1947年(昭和22)3月卒業」に分かれています。

敗戦から戦後にかけての混乱期、明星の入学・卒業・生徒数がどのような状況だったのかを詳しく調べたくても、1945(昭和20)年度～1949(昭和24)年度までの5年間は学籍簿も児童生徒名簿も見つからず(作られなかったのかもしれない)、また残された記録も大変少ないため、前後の資料をもとに推測することしかできません。また卒業生も高齢化し、証言を得ることも難しくなっていました。本稿も乏しい資料をもとに推測した内容を含むため、もし間違っていたらご指摘ください。



明星学園新制中学校が男女共学で開校

1947年(昭和22)4月1日、学制改革(6・3制の実施、新制中学校の発足)が実施されるとともに、明星学園では照井猪一郎校長のもと、新制中学校をスタートさせました。国の制度としては、この4月から「旧制中学校(男子)・高等女学校の生徒募集を停止し、1・2年生を新制中学校の2・3年生として収容する」となっていましたが、明星ではどうだったのでしょうか。

1947年(昭和22)4月、明星学園の新制中学校が男女共学で開校しました。新1年生(20回生)は2クラス、原田満寿郎先生と恩地邦郎先生が担任でした。3月まで中学部と女学部の1・2年生だった学年は、新制中学校の2・3年生(19・18回生)に組み入れられました。2・3年生が男女別学の旧制学校から新制中学に変わってどのような学校生活を送ったのか、実際にその時代に在学していた方のお話をぜひお聞きしたいものです。なお、1年生は少し前まで共学の小学生だったこともあり、抵抗なく新しい中学生生活を始められたようです。



新制中学校第1回入学式(20回生)
1947年(昭和22)4月



新制中学校最初の遠足・村山貯水池
女子は1・2・3年生、男子は1年生のみ
1947年(昭和22)9月

この時点ではまだ中学部・女学部の生徒も4年生(17回生)・5年生(16回生)として残っていました。卒業生の松本唯史さん・田中一水さん(二人とも16回生・明星の元教員)によると、戦争が終わったときに中学校3年生だった16回生は、翌1946年(昭和21)4月に中学部4年生になり、ようやく正常に戻りつ



つあった学校で授業と部活動(テニス、野球、美術、音楽、演劇など)を楽しんだそうです。※『明星の年輪—明星学園 90年のあゆみ』P.152、P.176

そしてこの学年が在学中の1948年(昭和23)に新制高等学校が発足しました。

中学部・女学部の生徒たちは3月に5年生終了で卒業するか、4月に新制高等学校の3年生に入るかの選択を迫られました。迷った生徒が多かったことでしょうが、松本唯史さんは5年で中学部を卒業し、田中一水さんは新制高等学校の3年生に残りました。

松本さん・田中さんらの学年16回生とその次年の17回生の2学年だけは、以上のような理由から ①旧制中学校(中学部)卒業 ②高等女学校(女学部)卒業 ③新制高等学校卒業 と3つの卒業区分に分かれています。

中学校に遅れること1年、1948年(昭和23)4月、新たに公布された学校教育法の下で、新制高等学校が始まりました。このとき公立校の多くは共学化されましたが、大半の私立学校は男子校や女子校のまま新制中学校・高等学校へと移行しました。しかし明星の高等学校は、当然男女共学でスタートし、創設以来の願いがようやく全校で実現しました。新制高等学校の初代校長は上田八一郎先生でした。

この1947(昭和22)年度の中学3年生(18回生)が新制中学校の第1回卒業生、1948年度の高校3年生(16回生)が新制高等学校の第1回卒業生となり、現在まで続いています。

明星では旧制中学校・高等女学校・新制高等学校・新制中学校・小学校……どの学校に通っても、また何年生で明星を離れたとしても、同じ学年でともに過ごした同級生を「○回生」としてまとめて表します(○は小学校の卒業回数と同じ)。

明星の創立年である1924年(大正13)に小学校3年生だった生徒が1回生、2年生が2回生、1年生が3回生で、以降毎年入学するごとに回数がひとつずつ上がっていき、2021年4月に小学校に入学した1年生(2022年4月時点の2年生)は、明星学園第100回生にあたります。



明星学園の教科書の成り立ち

● 国定教科書「ハナハト」読本



国定教科書『ハナハト』読本
『尋常小学 国語読本』1918～32年

それでは、ここからお勉強の話に移ります。さて、この教科書『尋常小学国語読本』巻1の表紙、文部省の1年生の教科書です。その教科書の最初のページは、「ハナ」だけです。



次にめくると、「ハト マメ マス ミノ カサ カラカサ」。挿絵が添えてありますが、これは皆さん、面白いですか。「ハト」はこのように書く、「マメ」はこのように書く、というのです。

依田先生 | これは1年生の勉強ですが、一瀬先生、明星では1年生は最初に何をやりますか？4月、5月はひらがなの勉強をするのですね。はい、ひとつそこが違います。それで、現代の教科書はどんな文ですか？

一瀬先生 | 文章というより文字を勉強します。

*一瀬清：元小学校教諭、元小学校校長

依田先生 | はい、明星では最初に文字を勉強しますね。国定教科書では、「ハナ」が最初のページで、次に開いたところが「ハト マメ マス」「ミノ カサ カラカサ」。「ハナ」にある花は何の花に見えますか？これは桜花です。文部省発行の教科書、これは第3期、1918年(大正7)から1932年(昭和7)まで使われたものです。この教科書を使っていた時代には、尋常小学校では、単語の勉強、単語の羅列から国語の学習が始まっていました。





国定教科書『ハナハト』読本
『尋常小学 国語読本』1918～32年

その次をめくると「カラス ガ キマス」
「スズメ ガ キマス」「ウシ ガ キマス」「ウマ
ガ キマス」「ウシ ト ウマ ガ キマス」。

依田先生 楽しいでしょうか？

堀内先生 楽しくないです。

*堀内雅人：中学校国語科教諭、中学校副校長

依田先生 どういうところが楽しくないですか？

堀内先生 子どもからすると自分の身近なことだったら楽しいし、表現しようと思うけども、ただこれだけだと…

依田先生 ただこれだけだと面白くないですね。ちっとも面白くない。「だから何なの？」「そんなの知ってるよ」ということになってしまいます。

特に都会の子どもであれば、小学校に入学したこの頃はもうすでに、この程度の字は読めたり書けたりしている子が多かった。しかも、明星学園に通わせるような家庭は、中流家庭が多かったと思いますけど、知識階層の子どもたちが学ぶのに、この教科書ではたしていいのかどうなのか。ずいぶん赤井先生、照井先生などなど論議があったはずですよ。

赤井先生は、前任の成城小学校時代から独自の教科書を作ることを熱心に推奨していました。1923年(大正12)3月、赤井先生は国定教科書(ハナハト読本)を批判し、成城小学校の機関紙『教科書問題研究』第36号(成城小学校発行)を通じて、「もはや国定の時期は去った。再び民間刊行の時期がきた」(教科書民間刊行論)と主張しました。また翌年3月発行の第38号でも、「国定教科書の範囲内で『どう』教えるかという『方法』ばかり論じても意味がない。『何を』教えるかという問題がより重要ではないか。教材論の起こらないのは教育界の浅薄と怠惰を意味する」と叱咤します。この文章が発表される頃、赤井先生は成城小学校を辞めて明星学園を創立し、新しい教科書づくりに取り組みます。



● 明星の教員らの共同研究が実を結んだ『新読本』

そこで、照井猪一郎先生が中心になって作ったのが、この『新読本』です。これを読んでみますと、「ハナ ハナ ハナ ヤ ハナ、ハナ ハナ ハナ ヤ ハナ」文部省教科書と似ているようだけど、ちょっと違うところがありますでしょ。リズムがありますね。



自主編成の教科書第1号『新読本』巻1
照井猪一郎著 1926年(大正15)5月発行

それから大事なことは、この教科書を使うのは4月ですね。入学して間もない4月です。4月に咲いている花は何でしょう？おそらく桜でしょう。だから、さっきの文部省の国定教科書は、桜の花なのです。ところが地域によっては、入学する4月という時期に桜が咲いているとは限りません。あの時期に桜が咲いている地域というのは、ごく限られているわけです。東北地方はほとんど雪ですし、南の沖縄では、もうとっくに桜の花は散って、緑の草花が茂っている。そういうことを考えていくと、大変難しいわけですね。照井先生もこの点に随分悩んだらしくて、ここに桜を持ってこなかったのです。確かに東京の4月は桜の花の咲くころだけでも、『新読本』では花屋さんが花を売り歩いています。そのころの東京でこんな形で花を売り歩いていたのか、それは今となってはよく分かりませんが、こんな挿絵入りの教科書が作られました。この『新読本』の表紙は美術の松岡正雄先生、挿絵は照井猪一郎先生が描きました。



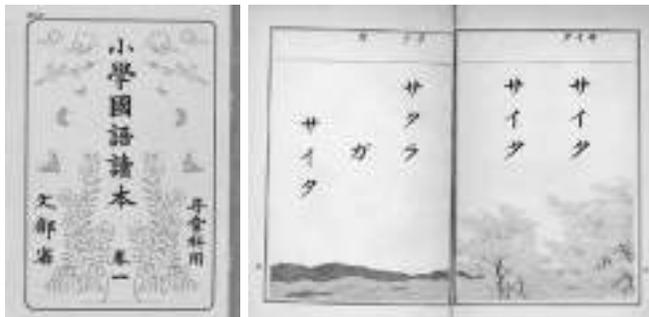


その次を見てください。

「サイタ サクラ サラ サラ ユキ カ モク モク クモ カ サイ タ サイタ サクラ」、やっぱり照井猪一郎先生も、桜を見落とすわけにはいかない。右の方は「ハナ ハナ アカイ ハナ。」女の子が赤い花を抱えています。こういうふうには、単語から文へという過程の中で、いろいろな工夫がなされていたわけです。

● その後の国定教科書「サクラ読本」に与えた影響

次にこちらは、文部省発行の尋常科用『小学国語読本』巻1、先ほどの国定教科書よりずっと後に発行された1年生用教科書です。



1933年(昭和8)改訂 国定教科書「サクラ」読本
『小学国語読本 尋常科用巻1』
1933年(昭和8)～1940年(昭和15)

「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」と。私はこれを小学校1年生の時に習いました。私が小学校に入ったのは1940年(昭和15)でしたけど、あの前後はこういう国定教科書が使われていたわけです。

大正自由教育の時代には、いわゆる「大正デモクラシー」と言われて、雑誌『赤い鳥』の刊行であるとか、北原白秋らの“童謡復興運動”などがありました。しかし、明星学園創立の頃は、大正デモクラシーの気運ももう退潮に向かっていました。

日本の行く道は、ファシズムの方へと大きく向かっていくわけですね。この頃に作られた国定教科書は、第4期になりますけど「サクラ読本」と呼ばれます。この「サクラ読本」は「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」で始まります。これをちょっと前の、明星の教科書「サイタ サクラ サラ サラ ユキ カ モク モク クモ カ サイタ サイタ サクラ」と比べてみてください。明らかに「サクラ読本」は、明星の『新読本』の真似じゃないかなと、剽窃をしたんじゃないかと思われます。

● 国定教科書の変遷



1933年(昭和8)年改定
国定教科書「サクラ」読本

「サクラ読本」のページをめくっていくと、「コイ コイ シロ コイ」「ススメ ススメ ヘイ タイ ススメ」こういうふうになっていくわけですね。これまで教科書に兵隊が出てきたことはありませんでした。この時が初めてです。時代がどういう時代であったか、移り変わりがイメージできると思います。やはり、時代相というものはよく教科書に映されています。

「オヒサマ アカイ アサヒ ガ アカイ」。そしてついに「ヒノマル ノ ハタ バンザイ バンザイ」というところに行くわけですね。よく世相を表しています。



文部省が教えようとしているのは、もちろん文字・文章ですが、何を強調するか、何を子どもたちの頭に植え付けるか、これを考えて作られたのが、さっきの「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」の後に「オヒサマ アカイ アサヒ ガ アカイ」。そして「ヒノマル ノ ハタ バンザイ バンザイ」だと。

文字の勉強が、つまりは心の勉強の方に移っていこうとしていたのです。私はこのサクラ読本の「サイタ サイタ」で勉強しましたが、そのころ小学校は「国民学校」という名前に変わりました。そして、その年、1941年(昭和16)12月に太平洋戦争が始まりました。

国語のほかに、「修身」という道德の教科書もありました。また、高学年には歴史という課目もありましたが、それらの中で文部省の教科書が一貫してアピールしていたのが、この日本国、大日本帝国の素晴らしさ、戦争の美談、こういうことですね。それは音楽の時間、唱歌の時間にも、天皇陛下の、明治天皇の業績、明治天皇が作られた歌を合唱するのです。それから軍歌ですね。

それらの洗礼を受けて、私などは誠に純粋な少年でしたから、模範的な軍国少年に育てられていきました。教育というのは、本当に恐ろしいものだと思います。

● 『新読本』 のコンセプト

明星小学校の先生たちが『新読本』をどういう意図で作ったのか、ということがわかる資料を皆さんにお渡ししてあります。資料①『新讀本』の前文です。

創立者の先生たちが、どういう思いで、どういうことに悩みながら、何に力を入れて、これらの独自の教科書を作っていたかということがお分かりいただけると思います。赤井先生が書いておられる文章を読んでみましょう。一番左の方に、「明星學園にて、赤井米吉」、「大正15年4月」(1926年)の日付で書かれております。



「児童の爲に此の讀本を選擇される父母、教師の方々に。」

「此の讀本は教師と父母と児童とが共同して作ったものです。

讀本は單なる讀み物とは違はねばなりません。單に讀んでその内容を知ったり、感じたりすること以外に讀む力を増すと云ふ要件が備って居なければなりません。児童が好んで讀むから善い讀本だとも云はれず、文字や語句を系統的に排列したものが善い讀本だとも云はれません。児童の現在に立って將來を眺めたものでなければなりません。従って讀本は児童の讀書力—(形式的に、内容的に、)—(趣味的に、研究的に)—の發達と同様に發達的でなければなりません。この要件を十分に満たすには児童の發達相を十分に知らねばなりません。然しこれは容易なことではありません。心理學はまだ極めて概念的なものを教へるのみです。私達大人の記憶はもう朦朧として居ます。又よしや明かに幼時を追憶し得ましてもそれは現代の児童にじっくりすることは出来ません。かうして多くの児童讀本はまだ児童の發達相にぴったりして居ない様に思はれてなりません。そこで児童と共同して作ったならば彼等自ら適當なものを選んで私達大人の想のとゞかぬ處を補って呉れるたらうと考へたのです。かうして出来たのが此の讀本です。

然しそれも容易な仕事ではありませんでした。先づ最初にこれを企てたのは我學園の照井猪一郎先生でした。児童の讀み物として適當しさうなものを全部謄寫刷にして児童に與へてその中で児童の好んで讀み行くものを視つめて行かれたのです。次に照井げん先生が、その次に霜田靜志先生、大高義一先生が先に選ばれた物を修正して又児童の反應状態を視つめて前後三ヶ年、四人の教師と百人餘りの次ぎつぎと入り来る児童によって作られたものです。その爲に要した謄寫刷の紙は數萬枚に及びます。材料を探したり、作ったりして、これを謄寫原紙に書き愈、謄寫してゐる中に夜を徹したことはどれだけあるか知れません。更に児童に與へたものは必ず一應は父母の方々にも目を通して貰ひました。そしてその感想、忠言も聞きました。中には文字の使ひ方、文章の構成について迄も細かい注意を與へて下さった方々もあります。又これを纏めるについては數次の職員會を開いて山本德行先生や私も加はっ



て色々と推稿もしました。装幀は松岡正雄先生がやって下さいました。かうしてこの讀本は我學園に關係のある凡ての教師と父母と兒童が一しょになって作ったものです。

まだ十分とは云はれませんか。他の教師、他の父母の方々が他の兒童に與へて御覧になったら或は多くの缺點を見出されるかも知れません。それはむしろ私達の期待するところです。私達の過去三年の研究を一先づ纏めて提出して廣く多方の土の御批判に訴へたら更に改善の暗示を與へられることだらうと考へまして、かうして世に出して見ることになったのです。兒童の教育に興味を持たれる教師、父母の方々がこれを兒童に與へてその反應の狀態を凝視して忌憚なき御批判を與へられる様切に御願致します。私達はそれによって愈これを完全なものにしたいと思ひます。」

若い先生方は謄写刷りなんて知らないでしょう？ ヤスリ盤に載せた蠟紙に先の尖った鉄筆で文字や絵を、カリカリカリカリして書きます。日本では「ガリ版」と言い、原紙に書く(描く)ことを「原紙を切る」「ガリを切る」と言いました。この原紙の上から黒いインクを浸したローラーを押しつけるように移動させることでインクが紙に転写される仕組みです。こうして文字を印刷したのですね。

大事なところは、ここですね。

「謄寫刷の紙は數萬枚に及びます。材料を探したり、作ったりして、これを謄寫原紙に書き愈、謄寫してゐる中に夜を徹したことはどれだけあるか知れません。」

「更に兒童に與へたものは必ず一應は父母の方々にも目を通して貰ひました。そしてその感想、忠言も聞きました。中には文字の使ひ方、文章の構成について迄も細かい注意を與へて下さった方々もあります。」



これは、お母さんお父さん方の応援がいろいろたくさんあって、これが大変に役立ったという、そういう感謝の気持ちを込めて書いている文章ですね。

当時の明星学園の父母の皆さんは概して都市中産階層の、日本の近代に生まれた新しいタイプの父母だったと思います。特に教科書を作ったり、修正したりする、そういうお手伝いができる方というのは、かなり学歴のある優れた力を持っている方々だったと思います。

例えば、童話作家の坪田譲治氏、詩人の北原白秋氏も子どもを明星学園に通わせています。そういう方々が、どういうことをどのように手伝ったか調べ始めましたけど、力及ばずそのままになっています。

私の隣に座っている卒業生・51 回生の大草美紀さんという方は、学園に關係する資料を大変苦勞して集めて、それを整理整頓して分類しているところです。私もあと 10 年くらい命が続くことがあれば、この辺りを少し調べてみたいと思っていますところです。



「又これを纏めるについては數次の職員會を開いて山本徳行先生や私も加はって色々推稿もしました。装幀は松岡正雄先生がやって下さいました。」

「かうしてこの讀本は我學園に關係のある凡ての教師と父母と兒童が一しょになって作ったものです。」

これはなかなか尊いことです。ここに登場した松岡先生とは、初期の美術の先生で、明星の最初の校章をデザインされた方です。



「まだ十分とは云はれませんが。他の教師、他の父母の方々が他の児童に與へて御覧になったら或は多くの缺點を見出されるかも知れません。それはむしろ私達の期待するところです。私達の過去三年の研究を一先づ纏めて提出して廣く多方の士の御批判に訴へたら更に改善の暗示を與へられることだらうと考へまして、かうして世に出して見ることになったのです。児童の教育に興味を持たれる教師、父母の方々がこれを児童に與へてその反應の狀態を凝視して忌憚なき御批判を與へられる様切に御願致します。私達はそれによって愈これを完全なものにしたいと思ひます。」

こんなふうにして明星学園では、基礎的な科学の、あるいは芸術の實踐を、早くから私たちの先輩が行ってきました。昔の先生たちも、このように教科書を作るとか、見学行事を頻繁に行うとか、あるいは体を鍛えるために登山やウォーキングレースのような形も取りながら、多様な活動を進めていたわけですね。

※『明星の年輪—明星学園 90 年のあゆみ』P.45 ~ 52



「沢柳精神の継承者」― 中野光先生の著書から

こういう明星学園の研究活動、実践活動にずっと注目して、あるいは注視してご覧になっていた方があります。もちろん何人もいらしたと思いますけれども、そのうちの一人、中野^{あきら}光先生は、特に赤井米吉先生の業績について調べて、「すごい実践をされた方だ」と、教育の研究会等々で随分赤井先生のことを取り上げてくださいました。明星学園にも3回講演に来てくださいました。そのうち1回はP T A文化部主催の講演会で“今後の明星学園はどうやって生き延びていくか”ということまでお話ししてくださいました。

中野先生のお話の根本は、「明星学園は教育研究を追求していく学校であってほしい」ということで、3回ともおっしゃっておられましたね。

その中野先生が、ご著書の中で書かれていることも、皆さんのお手元に資料としてお配りしました。中野光先生がご著書『教育改革者の群像』（国土社1976年）のなかに「沢柳精神の継承者」というタイトルでまとめられた文章です。

中野先生は、赤井先生の生きる姿勢を支えたものは信仰と家族、そして明星の「研究学校」としての発展であったと述べておられます。とにかく、経済的にこの学園を赤字なしに経営していくことについての赤井の苦労は大変なものでした。

「沢柳精神の継承者」から紹介します。

「苦難の中にあっても赤井の生きる姿勢を支えたいま一つのことは、かつて沢柳政太郎が明星学園の誕生にさいしても強く期待した『研究学校』としての発展であった。沢柳は明星が出来て一年後の赤井あての私信の中でも次のように述べていた。

『拝啓、明星創立はや一年、光陰矢の如しとは実にその通りと存じます。誠心誠意尽力することは第一ですが、方法も大切に、成城の如き



も、研究の方法、実地教育の方法に於て世間の学校の如く頗る不十分の所が多いと存じます。実験的、科学的の方法が欠けては十分の効果を挙げ得ないと存じます。』

これは赤井米吉が雑誌『渾沌』に「明星五年」という題名で書いた文章の引用です。続けて1930年(昭和5)4月4日、新学期最初の職員会議で、赤井園長がなにを話したかということ、中野先生が赤井の日記から調べまとめたところも読みます。

「一、天下、学校実に多い。その中へ我々の学園が出現したのは何の為であったか。文部省の定めるところのものを克明に実現しようとしてならば何もこう苦んでこの学園を建てる必要はなかった。実に新しい時代が要求する教育を実現せんが為であった。その為には文部省のものにも囚われず、厳密な批判を行って行かねばならぬ。勿論敢て異をたつる必要はない。」

反対のための反対をする必要はない、という意味です。

「然し、研究、実験の労をさけ、既成の教育に追従するのは学園の墮落である。深く慎まねばならぬ。その為には常に研究的態度をもって教材に、教法に」

何を教えるかということ、どんな「教材」で、どういう風に教えるかということ。

「研究をおこたらぬ様でなければならぬ。」

「二、児童の研究はその結果を残す様にして欲しい。」

やりっぱなしではなくて、ちゃんとどういうことを研究したか、それを後日役立てるためにも残しておいてもらいたい。



「教育の研究は一回的で、同一の児童に対して二様の研究をなすことは出来ない。」

教育の研究というのは一回勝負だという事ですね。

「従って前人の研究を後人が参考とすることによってのみ^{ようやく}稍 確實性を帯びるのである。故に学園の内部に於ても同人の研究を互に実施、批判することによって学園の進歩が期せられるのである。又、社会に対し、一般教育界に対してもそれが幾分の貢献をなすのである。」

つまり、反対のための反対や、文部省に対する反対ではなくて、実際に役立つもの、何をどう教えるかということ、みんなで勉強しろということを訴えているわけです。だから、その次の第3番目のとおり、教師の心構えについても触れられています。

「三、教育に於て何よりも大切なのは、児童を見ることである。教育そのものに於ても、教育研究の為にも、児童を見ないで、概念的に仕事をしては何物も生み出すことは出来ぬ。日本教育の行詰りは、結局教師が児童を離れる為である。教室に於て、運動場に於て、一層児童に親しまれんことを切に希望する。授業だけで、あとは職員室に閉じこもる様なことは絶対にさげなければならぬ。(後略)」

中野先生はこれを赤井先生の日記の中から見つけ出して、大事なことからこのように書かれています。PTAでお招きした中野先生の講演会の中でも、このことを強調しておられました。

私立学校にはいろんなタイプがあります。東大に入るためにもっと受験勉強をさせようという学校もあるでしょう。あるいは、美術家を養成するような学校もあるでしょう。それぞれ目的は違っているけれども、とにかく教育



の内容と方法という点においては、大きな違いはありません。澤柳政太郎先生の意志を赤井先生が受け継ぎ、具体的に私たちに一つの方向性なりヒントなりを常に教えてくださっていたわけです。現在の明星学園にもこれはピッタリ当てはまる事柄ではないかと思えます。

3番目はかなりきついことをおっしゃっています。授業だけやって、あとは職員室にこもってタバコでもふかしてればいいなんてもんじゃないのだ、ということを言っています。実際にはね、そのようにうまくいきませんが、教師の仕事が厳しいものであることは確かです。



質疑応答

私が今日のために用意した内容はだいたいこんなところですが、もうちょっと展開をうまく工夫して、皆さんにもっとわかりやすくお話しできればよかったのですが大変申し訳ありません。今日はここまで、用意したことだけ述べていただきました。残りの時間で、皆様からのご質問やご意見がありましたらお願いいたします。(以下、敬称略)

● 渡辺

先ほど『新讀本』の、明星学園の教師と子どもたちが作った教科書の話をしていただきましたが、大変な時間と努力をして作られたんだなということを感じました。片方で文部省の作った国定教科書があるわけですね。この資料には「選択される父母・教師の方々に」と書いてあって、どちらも選択して使うことは可能なわけですね。この『新讀本』を使ったことについて、保護者などから、何か意見のようなものはなかったのですか？

* 渡辺京：元中学校・高等学校社会科教諭、元中学校・高等学校校長

● 依田

『新讀本』について、はっきりと記憶しているものがないので今すぐに答えることはできません。1931年(昭和6)に学園で発行した『明星の教育』、あるいは1933年(昭和8)から発行した小学部教育月報『ほしかげ』などを詳しく読むと、当時の父母の意見を知ることができるかもしれません。これらの資料は学園資料室にあります。教師だけでなく、保護者の寄稿や教育関係者の論文や、子どもたちの作文が多く掲載されている貴重な資料です。

● 河住

明星の、教科書を使わないというところは、きっと今でも変わった教育をしている学校と言われてしまうのでしょうか。これまでひたすら、明星のやっていることに自信を持って、かなり



保護者の方々に、これで良いんだと説明をしてきましたけれども、やっぱり、「ちょっと変わった教育をしているんだ」と言われちゃう傾向があったと思うんですが、そこは依田さんも含めてどういうふうに、乗り越えてきたのかをお聞きしたいです。

*河住貴夫：元中学校体育科教諭、前中学校・高等学校校長

●依田 明星学園は反文部省というような、そういう気持ちでやったわけではなくて、子どもたちにとって、どのような教材が良いのかということ、話し合いを重ねてやってきたのだと思います。今そこに大野映子先生のお顔が見えますが、今ふと思い出しましたのは、あれは何年生ですか？『スーホの白い馬』は。

●大野 2年生の時に。

*大野映子：元小学校教諭(33回生)

●依田 僕は、大変印象深く覚えているのは、何人かの小学校の先生方と研究したんだよね。あの教材。

●依田 あの『スーホの白い馬』は、モンゴルの昔話を低学年の子ども、あるいは幼稚園児でも読めるように、優しく表現した物語なんですね。

●依田 あの時は検定教科書を使ったんですか？

●大野 いいえ、福音館の絵本を使いました。

●依田 なぜ検定教科書を使わなかったのですか？

●大野 検定教科書では、モンゴルの大草原、大平原が、子どもたちに



は伝わらないからです。

● 依田

そうです。検定教科書では、あの挿絵は本当にちょこちょこつと描いたというような感じで、モンゴルの広い広い、あの自然が全然感じられない絵に見えてしまうんですよ。文部省の検定済みの合格している教科書ですよ。だけど、明星の大野先生たちはこれじゃダメだと。子どもたちはモンゴルという地にどうというイメージを持っているか。こんなちっぽけな挿絵みたいなところじゃないんだということですね。あのスケールの大きさを、まず子どもたちに印象付けなくてはいけない。そのためには、この検定教科書ではなくて、あの福音館の絵本を使うべきだということで、ずいぶん前向きに論議していた。

● 大野

ものすごく勉強会をやりました。

● 依田

それを私はそばで聞いていて、たまに校長もどんな授業をやっているか見に行きました。その時に、いやーこれはすごい、と。僕はあなたに、なんであの絵本を見つけたかを伺いたかった。

● 大野

ありがとうございます。本当に明星だから絵本を使って授業をすることができました。なんて幸せな学校なんだろう、と私も思います。話し出すと私も 30 分でも 40 分でも話してしまいそうですが、あの横長の絵本で福音館は復活したという話を聞きました。その前に福音館は『スーホの白い馬』を正方形に近い形で出版しているんです。でもそれでは、福音館は倒れそうになったんだそうです。あの横長絵本を作ったことによって、復活したそうです。でも、そんなことは後で知ったことで、私はやっぱり大草原というあのスケール、赤羽末吉さんは何年もモンゴルに通って絵を描いていらして、その中からあの絵を



選んで『スーホの白い馬』の絵本にしたそうです。そういう歴史も後で勉強しましたが、本当に子どもたちに、大草原の中で羊を飼って、馬を走らせてっていう、ああいう生活を伝えるのは絵本にしかできない、と私たちは結論付けました。検定教科書と絵本の両方をここでお見せできれば一目瞭然で、もっとご理解いただけるのに、残念です。

● 依田 ありがとうございます。この会が始まる前に小中高の先生方に、皆さんどんなことが聞きたい、知りたいのかということ調べてください。それによって私たちの方で話の中身を考えるからと言ったところ、きれいにまとめられた「事前アンケート 先生方からの質問」というものをいただきました。まず「そもそもなぜ明星が作られたのか」という、こういう質問。次に「明星が検定教科書を使わないのはなぜか。今もそれで良いのか」と。大野先生は今もそれで良いと思っていますか？

● 大野 それは簡単に答えられることではありません。やはり一つひとつ、今出されている検定教科書を検討する必要があると思います。検討した結果、検定教科書をそのまま使うことは、今までにまずありませんでした。

● 依田 ありがとうございます。そのほかの質問を紹介すると、「創立者はどんな人だったのか」「明星を支えてきたバックは何か。スポンサーはいたのか」「明星におけるPTAの役割・大切さは何か」というようなことで、たくさんの質問が出ておりますけれども、中にはちょっと答えにくいような質問もありました。「自由の森学園と分裂後、どのようにして明星を再建したのか」、これはちょっと語りにくい話ですね。再建、というのかなあ。「依田先生が明星で大切にしてきたことは何か」「音



楽はなぜ合唱だけなのか」というようなこともありました。

● 剛力

小学校の校長をしている剛力です。今日はお忙しい中皆さんありがとうございます。依田先生もありがとうございます。一番最初に創立者たちは麦畑を建設地として決めました。収穫した麦が口に入れば命を繋いでいきます。ところが教育に使命感を感じた赤井先生たちが、その麦を刈り取ってでも人そのものを育てるということで、学園の建設に踏み切ったというところに感動します。この文は何度も読んでいますが、明星はすごい学校だなと思いながら勤めてきています。その「人そのものを育てる」ということを、依田先生がどのようにお考えになっていらっしゃるのか、お伺いできればありがたく思います。

* 剛力正和：元小学校体育科教諭、前小学校校長

● 依田

ちょっと難しい質問ですな。最後もういっぺん言ってみて。
(会場笑)

● 剛力

逆にいうとわかりやすいことなのかもしれない、当たり前といえば当たりの、「人そのものを育てる」ということを大切にしたい学校、学園なわけですよね。で、もう一つ言えば、明星「学校」ではなく明星「学園」と名づけたところに、根本的な考え方があるのではないかと理解しています。いつも、では「人そのものを育てる」とはどういうことなのかなと常々考えるわけですね。子どもたちと向かい合いながら、本当にそれで良いのかなと。そういうところで、何をどう教えれば良いのかなという事を常々考えているものですから、依田先生が「人そのものを育てる」ということをどう考えていらっしゃるのか、お聞きできればありがたいです。



● 依田

難しい質問ですね。ちょっと答えられません。(会場笑)そういう抽象論ではちょっとお答えできません。十人十色の人間を、何も同じ枠に収めていくことは必要ないだろうと思いますよ。明星のような規模が小さい学校であれば、子どもたちと日常的によく付き合いを深めることができるんじゃないでしょうか。教員が高い教壇の上から「おい、こら、お前は」というふうな学校は、もう日本にはないと思っていたけれど、まだいまだに結構あるんですよ。昔小・中の教頭だった無着さんは明星にいた頃から点数廃止論者で、テストの点数なんかはつけるものじゃないと言っていました。あれだって議論がいろいろあると思いますけどね。受験のための教育とか、何のための教育とか、いろいろ必要に応じてあると思いますけど、やはり人間が人間を教えるということは、とても難しいことなんです。それを難しいからと言って手抜きはダメだという、本当にわかりやすく言えばそういうことですね。

● 依田

子どもたちの行動、それを認めていくことは大事だけれども、過度の甘やかしはやっぱりダメだと思います。「やって良いこと、悪いこと」、いつもそういうふうに、子ども自身に考えさせることが大事だろうと思いますね。内藤哲彦先生という国語の先生がいました。彼が病気で亡くなって20年近くになりますか、私よりも二つばかり年齢は下ですけれども、彼がいつも教室で子どもたちに話していたのは、「やって良いこと、悪いこと。やって良いこと、悪いこと」とこういうこと。みんなが「やって良いこと、悪いこと」、こう言っているうちに、それが見事に子どもたちのものになりました。そういう子どもたちとの間柄と言いますか、信頼関係がとっても大事なことだと思います。先程紹介した中野先生が最後におっしゃっていたことにもありましたね。「子ども嫌いで、すぐ職員室に戻って



しまうようなことのなきよう」なんてね。小さいことのようにすけれども、とても大きな事柄だと思います。やはりお互い人間ですから、子どもも小さいなりに人格を持って、生きて生活しているわけですから、分かち合いながら進めていくしかないのだらうと思います。それぐらい難しいんですね。私たちの、この仕事は。どんな仕事も大事、大工さんも大変だし、左官屋さんも大変ですけれども、私たちの仕事もそう楽なものであっても、いかん。だけどやっぱり、あなたにお伝えしましたけれども子どもたちには『いつも 元気で ニコニコ』と、こういう言葉を教えてくれと。これは私、照井猪一郎先生から教わったというか、先生から盗んだ言葉です。

● 依田

照井猪一郎先生はあまりおしゃべりな方ではなかった。ほとんど無言の行為、というのが私の頭には染み付いています。入学式の時には、子どもたちに一番分かりやすいと考えられたんでしょうね。「君たち今日から明星学園小学校1年生だよ。みんなに何をプレゼントしようかね。そうだな、これが良いな」と言って「みんな 元気で ニコニコ。そう言ってごらん、はい!」「みんな 元気で ニコニコ」「明星の子どもたちはそういう子どもたちなんだよ。良くできた、良くできた」と言ってね、入学式の時に褒めておられたことを思い出します。剛力さん、今度あなたは校長になられた。ぜひこいつを子どもたちに教えてくれって言ったら、早速話してくれましたね。子どもたちは元気でニコニコですか？ はい。ありがとうございます。あまり答えになっていないかな。(会場笑)

● 依田

もうひとつ思い出したのは、早くに亡くなりましたが、立川談志という落語家がありました。彼がいつだったか雑談しているなかで、「学校の先生なんてのは良いよなあ」「え、なんで？」



「だってさ、下手な授業してたって月給もらえるんだろ」「いや、下手な授業なんてことはないでしょう」と言ったら「いやそうだろ。俺たちみたいな噺家は下手な話やったらお客は来ねえよ。おまんまの食い上げよ」と、こういうことを言っていたのをときどき思い出します。元校長が偉ぶって、皆さんに教えるを説くような、こんな関係じゃ困りますけども、実際私たちの仕事は大変ですが、まあ、とにかく頑張っってやっていくしかありませんね。ということで、平野先生にお返しします。

●平野
(司会)

ありがとうございました。今日は明星学園の草創期の話が中心でしたが、明星の基本的な精神、この学園がどういう思いでつくられたのかということが、よく伝わりました。今日は依田先生、本当にありがとうございました。(拍手)

講演では、小学校創立にまつわる部分しかお話しできませんでしたが、本誌編纂にあたり、中学部・女学部の創立から、戦後の学制改革によって誕生した新制中学校・高等学校について加筆しました。



編集後記

依田好照先生に初めてお会いしたのは、1984年(昭和59)、創立60周年を迎えた年の夏のことでした。私はその日、明星学園の講師になるために、山梨の田舎町から生まれて初めて井の頭の地を訪れたのでした。

校長室でお会いした依田先生は、長身な上に背筋がピシッと伸び、凛々しくて、どことなくイギリスの紳士を思わせる雰囲気がありました。そして同時に、遠藤・無着体制に代わり、たくさんの若い教員たちと一緒に、「これから、新しい明星学園を創っていくぞ!」という気概のようなものが感じられたのを覚えています。あれからおよそ40年、まもなく創立100周年を迎えようとしています。

私が見てきた限り、依田先生は最も「明星愛」にあふれた方の一人です。そして、なによりも明星学園の歴史に最も精通された方です。そんな依田先生が私たちの熱烈な要請に応じて、「明星学園創立100周年記念講演会」でお話をしてくださいました。

講演会の内容も明星愛にあふれるものでした。

「子どもたちにとって、何をどのように学ぶのが最良なのか、子ども中心に考えること」「澤柳先生から赤井先生、そして今日まで受け継がれてきた、研究学校としての立ち位置を再確認すること」「この100年、保護者の皆さまのご支援・ご協力に支えられて現在の明星学園があるのだと忘れないこと」これらのことを、私たちにもう一度呼び起こさせてくださいました。

この「依田好照先生講演会 明星100年で学んだこと」をぜひ多くの先生方・保護者の方々に読んでいただき、明星学園が100年にわたってどんなことを大切にしてきたのか、改めてご理解いただければ幸いです。

最後に、この講演記録の編集に際し、PTA役員会の皆さまが長時間にわたる講演内容を丹念に文字起こしし、またその内容を保護者ボランティアの皆さまがよく読み込んで、たいへんわかりやすくきれいな形に編集してくださったことに、心より感謝申し上げます。

編集委員長 河住貴夫



依田好照先生講演会「明星 100 年から学んだこと」
編集委員会

—編集—

河住 貴夫（常務理事、元中学校・高等学校校長）

編集ボランティア 藤原真由美（9-1 保護者）

池田 玲子（8-1 保護者）

八幡 絵美（8-2 保護者）

山尻 直貴（8-1 保護者）

川井 伸夫（9-4 保護者）

—文字起こし—

明星学園 P.T.A. 2020 年度役員会

石原まさみ

芝 このみ

竹本 琴子

松岡 由紀

三十日明子

—表紙イラスト— 八幡 絵美

—協力—

渡辺 京（理事、元中学校・高等学校校長）

大野映子（元小学校教員、卒業生 33 回生）

串田妙子（評議員、卒業生 36 回生）

大草美紀（資料整備委員会、卒業生 51 回生）

2022 年 5 月発行

編 集 : 依田 好照先生講演会 「明星 100 年から学んだこと」
編集委員会

発 行 者 : 学校法人明星学園 平田 和孝
〒 181-0011 東京都三鷹市井の頭 5-7-7
TEL 0422-43-2195

印刷・製本 株式会社 文伸

